
閉塞へと

時氷 流水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
閉塞へと

【Nコード】
N9561Q

【作者名】
時氷 流水

【あらすじ】
この話、いきなり終わります

Prologue

プロローグ

「結局のところ、何もいいことなんてなかったな……」
気がつく、そんな言葉が溜息とともに漏れていた。

正直、俺は中学へ入学し卒業するまでの間、いろいろと未来への希望を抱いていた。花びら舞い散り、毎日が馬鹿みたいに楽しくてたまらないような、そんな毎日を大いに期待し続けていた。

だがそれも今月の下旬に終結の宣告をうけて、結果として始めの独り言で言ったように、これっぽっちもいいことなんてなかった。だが、そんなことは心のどこかでわかっていた。ただそれがひっそりと隠れて、自分の意識に見つからないように逃げ回っていたのだ。

体育祭は脇にちょこんと立って何もせず、リレー以外に活躍はしなかったし、というか出してもらえなかったし、一日中だるくて自分の応援席で同じような友達と閉会式までしゃべっていた。そのほかの行事の際も全くといっていいほどに、呆れるのを乗り越えて感動されるのではないか、というほどに目立たなかった。

だからといって全く何もしなかったというわけではない。

生徒会に立候補したり、変なギャグを飛ばしたりしてグループの中で目立とうと頑張ったのだ。だがしかし、それらはすべて決定されていたかのように不発に終わる。

俺はただほんのちよつと周りから光を当ててもらえばそれだけでよかったのに……

みんながみんなするような、朝昼晩の食事を平然と取るように平日は毎日学校に行って帰る。そんな日常にちよつとしたいいい色をプラスしたかったただけだったのに。

たとえば、夏になったら元気な男友達と海やプールに行ったり、ちょっとかわいい女子とウィンドウショッピングを毎週のように行ったり、さ。

だが、そんなものは夢物語で終わってしまった。

もう高校では何もしない、そう決めていた。中学でやった無駄な努力をもう一度やろうなんていうほどにエネルギーは残っていないかった。

もう俺は地味に高校生活を終えて、普通にオトナになればそれで十分よかった。本当はもっと充実して、望みある人生を送りたいと思っていたのだ。

こっちのたとえば、そうだな、生徒会でいろんな仕事を頼まれては難なくこなすスーパード役立ち役員！とか、いつも面白いことを言ってみみんなを笑わせるクラスのムードメーカー！とか、さ。

たがしかし、そんなちんけな、どんなガキでも見るような夢ははかなく散ってしまった。

もう夢は見たくない。

もう無駄に頑張りたいくはない。

そんな希望の水脈が枯れきった状態で俺は、高校生になった。

1
初登校で、なんとなく中学のときに通った道と違うことに小さな緊張と違和感を感じながら、これから少なくとも三年は世話になるであろう高校に向かっていた。

しかしまあなんだ、俺は今まで自分の住んでいる場所がここまで複雑に入り組んでいるところだとは思わなかった。

以前は車できたために自転車で行くルートを考えていなかった。大失敗だ。

まさか迷ってたりしないだろうな？

そう考えているとどうしてか、そうなってしまっているんじゃないかという不安が沸いてくるから不思議で、それに加えて初登校だということがいやに拍車をかけた。

「少し急ぐか」

息を切らせて、学校に着いたのは入学式まであと五十分はあるほどの時間だった。登校初日だからと言って早めに家を出たのが悪かったか。

クラス割りの紙は張り出されていたものの、新入生はおるか在校生も教師も全く見当たらない。

日にちを間違ってるんじゃないか、なんてことも考えたが、そういつたことはない。俺は今日という日が来るのが嫌で嫌でしかたなく朝起きたときから五回はカレンダーと顔を合わせていたからだ。まあ、見るたびに今日が本当に今日であることを思い知らされたが。

とはいっても、教室に入ると虫かこのつかまった虫のように息苦しくなってしまうた。上級生もいないし、校内散策でもしてみるか、

いい暇つぶしになりそうだし。

しかしこの校舎、外は白いペンキに茶色い染みがついてるほど汚かったのに中は割ときれいだった。床も木ではなく病院の中のようなゴムのような床だった。それは当然新入生が入ってくるんだから掃除くらいはするだろうが、この県立高校はすでに創立百周年を迎えたという話だったので、中はもっと古風な感じになっていると思うたが、そうでもないらしい。

自分の使いそうな教室などを少しずつ覚えながら回っているとふと目に入った。

ちょうどこの先の突き当たりに図書館がある。読書がそれなりに好きな俺はこの部屋に入っている本たちと同じ教室の連中より早く見たかった。学校に着いたときは自分の発する音しか聞こえなかったが、今は少し人の声も聞こえるようになってきた。もうそろそろ教室に行ったほうがいいのかもしいないが、入った。

「あ………」

どちらからともなく出た声。

入り口で女子と鉢合わせしてしまった。背が低く、髪が長いので女子だと思った。右へそれて通すつもりが彼女も右へきてしまう。それならと今度は左へ、このままでは図書館にずっと入れなくなるので後ろへ下がって先に通した。恥ずかしかったのか、小走りで去っていった。

立ちほだかる障害物をどかした俺は、二人目がいないか気にしながら図書館内へ入った。

すると図書委員とおぼしき上級生が話しかけてきた。

「何してるのもう閉館よ、借りたい本があるなら放課後にまた来なさい。って、あなた新入生？」

しかめっ面をしている。

「まあ、そうですけど」

「なんでこんな時間に新入生がくるのよ、大体校舎の見学だってまだ終わってないでしょ？」

大半の奴らはそうかもしれないが、俺はすでに暇を潰すために校内をぶらぶら歩いていたのだ。

「退屈しのぎですけどね」

多分もう校舎で迷ったりなんて事はないんじゃないかっていうくらいにな、少なくとも全校舎のトイレの場所は全部覚えた。

「バカ？」

「はあ」

知らない人にいきなりここまで言われると正直かなりへこむ。それにバカは言いすぎだろ、かなりグサツときたぞ。

それになにか嫌な予感がする。なにやら面白くない展開になりそうだ。

「はあ、ってねえ。あんた少しくらい高校生ライフに向かって期待とかないの？」

俺は過去の自分を一通り説明することにした。

「なるほどね、もう期待はないときたか、バカに追加して死ぬ直前の武士ね、おさむらいさん」

「毒舌とか言われたことありませんか？」

「一発殴るわよ」

しかめっ面がよく似合う。

「すいません」

「あ、それと本だけどね、もう閉館だから放課後に来てくれない？それにちよつと話もあるから」

いったい何だろうか？まあでも、どうせ知り合いを作る気はないに等しい。どうせ時間なんてどうにでもなると思って、OKをとった。

校長の一貫してねむねむな祝辞と、教室に戻ってからの担任のありきたりな自己紹介を終えて、やはりというかなんというか、午前中にはあっさり放課後となった。まあ投降初日なんてどこもこんなものだろう。

俺は行事のあと独特のやけに体が軽い感じを味わいながら、図書館に足を運んだ。朝の図書委員はカウンターで読書をしている。目が会つと朝とは違う優しい微笑をしてきた。昼前の柔らかな空気のせいだろうか、落ち着いていて、心安らぐにおいがするような気がしたのは、勘違いではないだろう。

さて、こうして図書館に来たわけだが、どうすればいいのだろうか？一応聴いておこう。

「あの、図書委員さん」

我ながらその呼び方はどうよ、と思ったが口から出てしまったものは仕方ない。少しむっとした表情を見たような気がしたが、原因がわからないので考えないことにする。わからんよ、断じて。

呼びかけると、読みかけの本にしおりを挟みカウンターの机に置いた。

「まっすぐきたようね一般生徒、悪いけどすぐ本を読むことは出来ないわ。ちょっと話があるからこっちきて」

俺のネーミングに絶対に不満があるように俺は「一般生徒」と名づけられた。なるほどイラツとくる。

カウンターの後ろにある、一般生徒は行かないだろう扉を開け、入る。俺に向かつて人差し指を上に向けてこまねいた。「入れ」ということだろう。

中に入って、ドアを閉める。

「で、話ってなんですか」

「それも大事なんだけど、とりあえず君の名前教えてくれるかな？
わかんないと困るでしょ、いろいろと」

「千間^{せんま}遼^{りょう}です」

そう言つて事務机からメモ用紙とボールペンを取つて名前を書く。
「へえ、千間^{せんま}って珍しいね。私は草の葉っぱに灯^{あかり}すつて書いて草葉灯、よろしく」

言つと草葉灯はボールペンを取り、紙に漢字、その上に（くさばあかり）とふりがなをふつた。

「初めて会う人に時々（くさは）って呼ばれるんだよね」

と、少し困ったような顔をして、そこから真剣な表情になり、こう言った。

「これからする話はあなたの人生を変えらと思う。でも、今までだって何かを選ぶたびに別の自分を捨ててきた。そう考えれば自然なこと。だからリラックスして聞いて」

「・・・はい」

そこまで大きく話そうとしているのだ。果たしてどのようなことを言われるのだろうか？まさか「これから国外逃亡するわよ」的なことを言われるんじゃないだろうな、まあ俺は、別に今後に期待してなどいないが。

草葉さんが口を開く。

「図書委員に入ってくれない？」

「は？」

今、何と？図書委員？いやまあそれはいいんだが・・・

「だから図書委員、聞こえなかったの？その歳で難聴は将来が心配になってくるんじゃないの」

「いや、そういったことでは無いんですけどね、ここは教室より居心地いいし」

やっぱりこの人は口が悪い。多分口の悪い人選手権とかあったら結構いいところにいくんじゃないのだろうか。

「あ、そうそう、紹介するのは私だけじゃなくてもう一人いたんだっただ」

そう言って草葉さんは入り口に目を移した。ドアに隠れてこつちをのぞいている。知り合いなのだろうか？

「坂本藍ちゃんよ。ほら、こつち来て」

その坂本さんはせかされるように手をつかまれ、なかば引きずられるように部屋に入ってきた。

「はい、これに名前書いて」

言われて机に置かれる紙とペン。焦っているのか動きが早いうえ

に、ペンも震えている。それでも頑張つて名前を書き終え、蚊のな
くような声と早口で自己紹介をした。

「二年坂本藍ですよろしくお願いします」

ギリギリ聴き取れた。どうやらかなりのアガリ症か恥ずかしがりの
ようだ。なにやらこつちをちらちらと見てくる。俺の顔に何かつい
ているのか？

「そついえば私達、自己紹介してなかったわね」

要するに自己紹介しろ、つてことか。仕方ないがやることにしよ
う、クラスでのどこかで聞いたことのありそうな自己紹介には面白
みが全くと言って良いほどに無く、この不満をどうやって発散する
か悩んでいるところだった。

「名前のほかに？」

「最低でも名前と自分に足りないもの、癒したいものを言つて。あ
とで理由は説明するし、それが今後の行動方針を決定することにも
なる。大丈夫、悪いようにはならないわよ、きつと」

微笑を浮かべてそう返してくる。その自身はどこからやってくる
もののだろうかと一瞬思ったが、根拠など特に無いのだろう。

それに説明するということは図書委員に入るとはまた別のことをす
るから必要になるのだろうか。しかし自分の普段言えないようなこ
とを伝えると言つのは今まで思っていたよりも難しそうだ。このこ
とを言つて、今朝のカレンダーのように自分に確信を押し付けるよ
うな気もしたが、そんな事を考えて何になるのかもわからない。避
けられたりしないかどうかも気になったが、それよりも今まで他人
に伝えられなかったせいなのか、知って理解して欲しいという気持
ちのほうが強かった。

なるべくよく伝わるように息を静かに深く吸い込んで

「八鶴市東中からきた千間遼です。僕に足りないものは精神的に充
実した時間、癒したいものは自分が人に対して何の期待もしなくな
った感情です。原因は中学時代にどれだけ頑張っても結果がついて
こなかったことにあります」

結構うまくできたな、と思いつつも今まで覗かれなかった一面を自分からさらしたのはあまり気持ちのいいものではなかった。

「どう？ やっぱりたまつてたものを吐き出すとつかえてたものが取れて気持ちいいんじゃない？」

どうやらこの人は俺のような考え方はないようだ。さっぱりして時折毒を吐くこの人に大した問題はなさそうだった。問題が自分から離れていくのかもしれない。

「草間さんはそうなのかもしれませんが、僕はむしろたまつてたものを吐いたせいで毒の正体をさらに間近に見てしまった気がしましたよ」

「そう」

人に聞いておきながらなんともそっけない返事だ。

「で、次は先輩の自己紹介じゃないんですか？」

「は、私？ なんで？」

「なんでって、僕が自己紹介したら次は先輩の番でしょ？」

自分だけ話してもなんとなくだが不満がある。というか、さっき「私達、自己紹介してなかったわね」的なことを行っていただろうに。

「ああ、あれね、あれは嘘、そうしておいたほうが言いやすいかな、と思って」

何だそれは、言うのは楽ではなかったし、それに足して騙された感が沸いてくるぞ。

「ま、いいわ。みんなそれなりに形にできないものを持つてるみたいだしね。それが実際どんなものかは活動をしながら知ればいいし」
「おいおい、俺はまだこの中のメンバーの誰からも話らしい話をきいてないぞ。それゆえに俺以外の人間がどんな奴かさえも見当がつかない。」

「というか、形にできないものってなんですか？」

「それは」

「ん？」

俺と草間さんとの会話の中で今まで全く話しかけてくることの無かった女子、坂本藍が割ってはいってきた。

「それは、この新入生の人の中で、元々の自分からはずれてしまったときに傷ついた人たちの心のことです。そして、そういった人を集め、その人を癒し、なんとかして心の傷を小さくしよう。といったことをしようとしています」

いきなり話しかけてきた割にはよく話すもんだと思ったが、聴いているとどうも理不尽なことを考えてくれるじゃないか。

「それ、当人にとってはただのはた迷惑だぞ、自分の問題を他人が勝手に解決してそれを自分に自慢されるようなもんだぞ」

言つと坂本は首をかしげ、言ってることがわからないとでも言うような顔をした。そしてこいつのいった言葉。「心の傷を小さくする」と言ったか。はつきり言って放っておいてほしい。

「まあ、そんなことは言わないで、というか図書委員になった以上はこれには参加せざるをえないわよ。諦めて投降しなさい愚痴ざむらい」

さてどうしたものか、いや、どうするべきか。この人に毒を吐かれ、傷をわざわざつつかれる必要はあるのだろうか。だがしかし、ここを居場所にしないととなると、いよいよ学校内に俺の居場所はないくなる。

悩むことなんて無かった。

「わかりました、煮るなり焼くなり好きにしてください」

考えてみればあの自己紹介は俺なりに助けてほしいという感情を詰めこんだものだったのだ。そしてこの人間はどうやらそれに応じてくれるようだった。だったら伸ばされた手をつかんでみても悪いことにはならんだろうし、悪い人たちではないようだ。ここでとりあえず1年間お世話になるのも悪くない。

「それじゃ決定ね、これに名前書いて」

紙には「委員会参加希望用紙」と書いてある。もちろん書いたさ、

すらすらとな。

草葉さんはそれを取って爪を立ててピッチリ二つ折りにした。

「これで千間君は正式に図書委員になりました」

「よろしく願います。草葉さん、坂本さん」

俺はさりげなく二人のほうをむいて、とりあえずの挨拶のようにそっけなくではあるが声をかけた。

「これからよろしく願います」

「お願いされました。じゃあ遼君もお願いされてくれる？」

「はい？」

「基本的に私達、名字で呼ぶのは禁止だから下の名前で呼んでね。そっちのほうが親近感が沸くってことでね」

そんなものだろうか。

「よろしく願います、……遼くん」

「ああ、よろしく…藍さん」

「ちよつと、灯さんはないの？」

「灯ちゃん、ちよつかい出しにくいから…」

いや、なごんでなんかいないぞ。

ちなみに今日の大体はこんな感じの流れであり、まだ日が短い春先はすでに太陽が今にも半分ほど隠れて遠くの地面と重なってしまっている。

「先輩、もうそろそろ暗くなりそうですよ」

そう言ったあと、タイミング良くか悪くか、最終下校の放送が流れる。

「そうね、今日は帰りましょ、この周りって田舎だから終電も早いのよ」

もうすでにお決まりとも言えそうになった草葉、いや、灯さんの口からでるこの不満や悪態、その他もろもろの愚痴を聞きながら昇降口へ向かい、駐輪所へ行く。どうやら二人は電車のようなだった。

帰り道、音楽を聴きながら信号を待っているとき、ふと思い出した。「ここって、そこまで田舎なのか」

翌日、俺は普通の生徒より一時間ほど早く学校に着くため、早めに家を出て、学校へ向かっていた。花が散り、葉に変わりつつある桜は周辺の道路を桜色に染めている。風も昨日と比べるといくらか温かくなった気がする。それでも俺の気分はリラックスしていなかった。

なんでも図書委員は毎朝のホームルーム前に図書館を開放しているらしく、そのときにカウンターで店番ならぬ図書館番をする役目があるという。とは言っても現在の図書委員は俺を含めても灯さんと藍さんで三人だ。今は先輩二人で一日ごとに当番の交代をするんだとか。

「こない日なのに、俺は早起きして学校に行ってるのか」

そして灯さんの当番は今日で、俺にいろいろと委員の仕事を説明する必要があるのかなんとか言っていて明日（つまり今日）の朝に登校するように、と指示した。

「疲れる仕事が必要がいいが……」

言っただけの大あくび、家を出た時間は五時三十分、その一時間には起きていたのだ。睡眠不足というのには十分だろう。自転車登校も楽ではない。

「朝から眠そうにしてるわね、昼ごろには永眠してるんじゃない？」

後方より言語型核爆弾

「うおっ」

この当人からさわやかに流れ出る毒、俺はまだこのようにコミュニケーションをとる人間は一人、心当たりがある。とりあえず自転車だから後ろから近づいてくるのはわかったものの、まさか灯さんだとはね。

「何で自転車なんですか」

昨日歩いて駅に向かってた。しかもここが田舎だとか何とか言ってる

「だって私あんたと同じ中学校の卒業生だもん、自転車でも行けるわよ」

委員長、大胆カミングアウト。

「それ、本当ですか？先輩がいたのなんて知りませんでしたよ。ていうかそれならどうして昨日は歩いて帰ってたんですか？」

俺の推測が正しければだが、この人は昨日駅まで歩いて行き電車で帰ったはずだ。

「ああ、あれね、親がこの辺で働いてるから帰りは時々一緒に乗って帰るのよ。あと先輩じゃなくて、灯さん」

やはりはずれるか、まあそれもそうだ。俺は見ていたわけではない。

「ねえ、遼」

そういえばこれが家族以外で呼ばれた初めての呼び捨てだ。他意はないが、喜びと変にぎこちない感じがして本当に呼ばれているのが自分なのか、複雑だ。しかしまあ、朝と言うのは眠いものだ。

「…なんですか」

「校門、通り過ぎてるわよ、グズ」

「ああ」

気付いて振り向くと五十メートルほど後ろに錆びた鉄の柵が半分開いた門があった。乗ったままUターンしてもよかったのだが、眠すぎてそこまでしっかり運転はできない、仕方ないが自転車は降りて押した。

図書館に入ると、坂本藍（以下坂本）さんがカウンター席に座って本を読んでいた。俺が引き戸を開くと人が入ってきたことに気付いたらしい。俺は眠気と今にも出そうなあくびをかみ殺してギリギリ母音にならない程度の声で挨拶をした。

「おはようございます」

「あ、おはよう……」

「早いですね」

「他にやること無いから……」

話が續かない。坂本はこの会話の間読んでいる本から視点に移そうとしていないし、俺は俺で話題を提供しようとか場を盛り上げようとかいような類の意思は全く無い。

要するに、会話はこれで終わったってことだ。

「ちよつと遼、話なんかしてないでこつち来なさいよ。私が何のためにあんた呼んだと思ってるのよ」

「あ、そうでした」

何だったかな？

「ほら早く、返却された本を書架に戻すからついてきて」

そう言つて俺に本を渡す。腕を伸ばして手に引つ掛けるようにして持つと、一番上にあつたヘミングウェイ『老人と海』がみぞおちに触る。これが結構な重さだった。

「推理系はここ、頭の数字が3のやつ、いわゆる三類書架つてやつね」

そう言つて俺の腕につんである本から一冊抜き取り、作者の頭文字で五十音順に並んだ本たちの間に差し込んだ。ちなみにその本はコナン・ドイルが書いたもので、コのちよつと真ん中あたりに戻された。

「わかつたかしら？番号は窓側からその反対側に向かつて増えていくから、番号と文字あわせて入れていつてね」

そう言つて一番上のヘミングウェイを取つてカウンターへ向かつていった。借りるつもりなのだろうか？

「ま、ゆつくりやるか」

五分ほどたつただろうか、大体が物語だから番号にさほどズレは無かつたものの、普通の文学小説ばかりでなくライトノベルなんかもいくつかあつて文庫本とハードカバーの棚を3回ほど往復したところで片付いた。

「腰がちよつと痛いな」

眠気は運動したから吹き飛んだものの、朝からかなり疲れてしまった。今日は入学式の次の日だから授業らしい授業は無いだろうが、教師が自己紹介などをするそれはそれで大事な日だった。

「りよーう」

変に間延びした感じに呼ばれる。

「次、これ戻して」

床に敷かれた新聞紙の上にうずたかく積み上げられた本があり、灯さんはその向こう側にいるようだった。

「マジかよ・・・、灯さん、あと五分ちよつとで授業始まつちやいますよ」

「それに関しては大丈夫、私がこのあと一年の学年担任に話していくから。いい？放課後までに終わらせておきなさいよ。あと、そいつら昨日配達されたばかりのやつだから。読めなくしたら保険金で払ってもらうからね」

それだけ言うと灯さんと坂本藍は積まれた本の置くから姿を現し、出て行った。

二人が出て行ったあと、俺は自分より背の高いそれを見上げた。ほとんどが文庫本だが、これだけあると壮観だった。

「まあいい、暇つぶしにはちよつとよさそうだ」

俺は今日の授業はどうなるのか気になりながらも、冰山ならぬ本山の一角を切り崩し始めた。

さて、そうしてとりあえず朝から昼まで延々と本を持っては書架に入れるという作業が続けてきたわけだが、これはかなりの重労働だ。一回に本を二十冊近く抱きかかえながら書架に入れていき、持っている本がなくなるとまた書籍の山に帰っていく。

そんなことを続けていた結果、腰と指がスムーズに動かなくなってきた。

「休憩ついでに飯でも食うか」

カウンターの、他よりちょっとクッションが柔らかい椅子に座り、かばんから弁当を出す。

いま、俺以外の生徒は全員四限の授業中だ。

「なんか、新鮮だな」

そうひとりごちって、弁当のふたを開けた。げ、ご飯がかたよってる。自転車のかごに入れたとき横になってたか。

弁当を食べた後は、朝からの眠気に勝てず寝てしまった。だがそれは仕方の無いことだ。寝た時間は十二時以降で起きた時間は四時半だ。むしろよくここまで起きていられたと褒めてやりたいところだね。そこで俺は人目もなかったし、そのままカウンターのテーブルに突っ伏して寝てしまった。

「んごっ」

自分の声だと気付いたのは数秒たってからだった。

「アホ！やることすっぱかして昼休みの終わりまで寝る奴がいるか！」

灯さんに怒鳴られたようだ。隣に坂本藍、手には朝に持っていたヘミングウェイをつかんでいる。縦にやられたのか、なるほど頭が響くように痛い。

「放課後までじゃないですか」

「半分しか終わってないじゃない、どうするの？」

「うーん」

見ると巨大な本のかたまりは俺の胸あたりまで身長を縮めている。

「多分終わりますよ」

半分寝ぼけているせいか、舌がうまく回らない。

「絶対終わらせなさいよ、放課後は図書館閉めて三人で食べに行くから」

「は？」

頭を叩かれバシン、と音がする。

「言葉遣いに気をつけなさい。そう、だって私達まだ本来の活動し

てないもの」

「本来の活動？」

授業開始三分前のチャイムが鳴る。

「それは後で話すから、今はもう少し近い話があるから、そっち優先できいて」

坂本がなにやら視線を泳がし始める。

「藍ちゃんこれから放課後まであなたと一緒に書架整理のほう手伝うから、よろしくね。それじゃ」

「あ・・・」

灯さんは急ぎ足で図書館を出て行った。俺と坂本が残される。

「それじゃ僕は本を戻すので、藍さんはカウンターに僕が一回に持つていく本を積んでおいてくれますか？」

この本を並べるといふ作業はかなり体力を使う仕事で、到底女子に任せられると思えたものではない。その点俺は要領はわかってきたし、結構作業のほうはそれなりにできるようになってきた。

それなら流れ作業のように分担したほうが早い、と思ったのだ。

「いえ、私もやります」

意外だった。この女子は自分の意見が言える奴だった。物静かだからてつきりあまり自己主張の得意でない人なのだと思っていた。

「僕一人で大丈夫ですよ」

「でも私書架整理できるし、それに遠くんかなり疲れていそうだから」

俺は少し考えて

「やるんですか？」

坂本藍は小さくうなずいた。

さて、それで書架整理の作業に移ったわけだが、最初の三十分で残りの本はくるぶし程の高さにまで片付いてしまった。俺は午前中と同じくヘーこらやっていたのだが、坂本藍という女子が加わったことによって整理のスピードは加速度的に速くなった。

そんな坂本と先ほど目が合った。彼女は頬を上気させてこんなこ

と言った。

「もうどれがどこに入るか覚えてるんだ」

なるほど、さすが図書委員だった。俺もそうなんだが、やはりやっっている年数が違う。

片付けが終わり、放課後までの時間は1時間ほど残っている。俺は図書館の中をうろついている。本当は本が痛むからいけないのだが、そこはたかが高校図書館でどうこう言えた話ではないし、そんなことよりその窓から日が差し込んでいて暖かい。

「今日、あったかいね」

坂本藍が、図書館のどこから話しかけてきた。

「そうですね」

なんとなくそう答え、流れる沈黙。俺は別に苦にならないからこのままでもいいと思ったのだが、向こうはそうは思えなかったようだ。

「遠くんってさ、結構言ってることやってることが違うよね」

「え？」

俺は全く意味がわからない、

「それって、一体どういう意味ですか」

「あ、ごめん。今の言い方だとちよつと言葉の取り違いがあるよね。自己紹介のとき遠くんはもう頑張らないことを決意したような感じだったのに普通に頑張ってる本の整理してるなあ、と思って」

そういった意味で言っていたのか、俺は一体どこの俺の発言がそう言われるようになってしまったのか少し不安だったが、なんだそういうことか。なら簡単に説明できる。

「ああ、あれは自分からの行動は面倒だって意味で、人から何かしると言われるのはなんとも思わないんですよ。言われた後は口ボツトみたいにして動くだけ、みたいな感じで」

うまいこと説明ができた。とこのときは思った。

「そう、なんだ」

「それにしても今日はしゃべりますね」

「うん、それでね、一つ遼くんに話しておきたいことがあるんだ」

「唐突ですね」

「うん、灯ちゃんの話さなくてもいいって言ったんだけど、やっぱり悪いな、と思ったから」

「何だろうか、当然俺と話しているときに出す内容だ。俺と関連していることなのだろう。」

「遼くんが来てからね、かなり詳しく遼くんの周りのことを調べさせてもらったの。遼くんの行ってた小学校と中学校に二人で取材に行つて、これまでに何が遼くんの周りに起きたか事細かに調べたの」
なんとまあ、中学のみならず小学校まで行くとはね。それにしてもちよつと坂本、少々シリ阿斯な感じになってきてるな。

「そしたらね、調べていくうちに私とちよつと似た境遇にあったんだなあ、と思えてきたんだ。それで私変な仲間意識を遼くんを持ってきたやつて」

なるほど、だからここまで饒舌になっているのか、俺としては別に誰が仲間意識なんぞ持とうが関係はないが、境遇が似ていると言うのはいまひとついただけない。俺と似た境遇なんて俺の近くにあるはずが無い。あつて欲しくもない。

「僕と似てるつて、一体何を根拠にしてそんなことを言ってるんですか？」

少々怒り口調になってしまった。それから少し間をおいて

「私ね、この高校に入学して一年は遼くんみたいな感じだったの。よし、何にでもがんばつて、全部成功するぞー、つてさ。でも現実はそのも甘くないんだよね、周りの人たちは頑張ってる人をさげすんだり、あわれんだりする。そして頑張ってる人は、」

そこで黙ってしまったが、おそらく続きの言葉はこうだ。

「頑張ってる人は独りになる」

そこからまた坂本は言葉をつむぎ始める。

「そつ、そして独りになつたら最後、集団に入るのも難しいし成功することも困難になる。まさに袋小路に立たされちゃうつてわけ」

そして、天敵である『集団』は自分達の環境が変わるまで唯一の通り道であるもと来た道をふさいで待ちかまえている。

「でもね、そんな袋小路を突き破って引っ張り出してくれた人がいるんだ」

まさかとは思ったが、それ以外に思い当たるふしは無い。おそらくこの珍妙な委員会に俺を引き込んだ人物。

「灯さんですか」

長く話す流れになりそうだったから先に言ってしまったが、はてさてどんな顔をされただろうか、館内にいるのはわかってても、どこにいるかまではわからない。

十数秒たっただろうか

「そこまでわかってるなら十分だね、悪いけど私はこれから読書に没頭することにしたから何の質問にも答えないよ、放課後まであと三十分、静かにしててね」

静かな声で返ってくる。俺は「わかりました」と一言いって、灯さんが来るまで延々と図書館の中を歩き回っているほかになかった。授業終了のチャイムが鳴り、廊下を歩く音が増える。どこからかパタンという本を閉じる音、次いで図書館のドアを開ける音。灯さんだ。

「よし、ちゃんと片付いてるわね、それじゃさつさと会議室に移動するわよ」

言いながら外へ出て行こうとする灯さんと続いて坂本。

ん、さてよ？会議室？たしか食べに行くという話ではなかったか？

「遼くん、私達はこれからファミレスに行くんだよ」

なるほど、そこで食べながらゆっくり週末どこ行こうか？みたいな事でも話し合うのだろう。

「早く来なさい、鍵閉めるわよ」

こうして俺たちは本日の図書館業務を終了、駐輪場に向かいながら考える。

「ファミレスか……」

思えば家族以外で外食なんていうのが久しぶりだ。

外へ出るともう日は沈み、薄暗くなりつつある。ファミレスへ向かう途中、ふと気付いた。

「そういえば、一体何を話し合っんですか？」

灯さんは一瞬怪訝な表情を見せたが、

「ああ、考えてみればあんたに教えるの忘れてたわ、まあ内容としては、そうね、今週末みんなで何かして遊ぼうってとこよ」

なるほど、新メンバーの俺が入って話も思うように進みそうに無い、さからついでに晩飯も食べちまえてことか。

「灯さんって結構合理的な人なんですね」

「何それ？私はただ食事をしながらのほうが会話がスムーズに運ぶからそうしてるの。それに私一人暮らしだからせめて食事くらいは複数人で食べたいってだけ」

なんと一人暮らしなのか、高校生にもいくらか一人暮らしという方法で暮らしている人間がいるのか。口が悪すぎて家を追い出されたんじゃあるまいな。

「ほら、言ってる間についたわよ、春とは言ってもまだ寒いし、中なら暖房きいてそう」

言いながら小走りで店へと入る灯さんは、どことなく何かを隠しているような感じがした。

実際はそうじゃなかった、隠し事なんて何も無かった。だがしかし、この変な感覚は後々別の形で襲いかかってくる。このあと、とんでもないトラブルが俺たち、特に俺以外のメンバーに降りかかることになる。

3
店はよくある普通のファミレスだった。とりあえずまだ夕飯といくまでにはかなりの時間があり、今はドリンクバーを頼み、灯さんの話を聞いている。

「で、これが私たちの行く遊園地のチケット」

そして俺にチケットの現物が渡される。

「ああ、ここなら何度か行ったことがあります」

「まあ、この県に住んでればたいていの高校生は行ったことがあるでしょうけどね」

最近は入場料が高くなっているので行っていないが、しかし浦安か・・・遠いな。

「予定としては今週の土日、つまり明日か明後日。急な話だったかもしれないけど、用事とか入ってる人、いる？」

「僕は特になにも」

「私も」

「それじゃ、日曜午前八時にここ集合で」

これで休日のヒマは潰せそうだ。どうせクラスで作った友達といつても休み時間に話す程度のやつばかりで「明日遊ぼうぜ」的なノリは絶対にありえない。

食事代は全員分おごってやってもいいかもな、と言っても二人分だが。

「さて、作戦を立てますか」

「は？」

二人が目ダイヤモンド級に光らせている。そしてその目はこれから悪知恵を出そうという少年のそれに近い。

「あ・・・あの、それはどういった意味で？」

たずねてみると二人はこっちをジト目で見てくる。

灯さんは頭をかき、

「あんた、午後は藍と一緒にいたでしょ？何できてないの？」

とはいっても、書架整理は別々にやってたし、その後はその後だったし、そのときの俺にきけるほどの根性は残念ながらない。

ということと教えてもらった。

・坂本家はかなりの資産家で、遠出するときはほぼ絶対にSPがついてくる。

・坂本藍の両親は相当に厳格であり、女友達でも一緒に外出する際は一度坂本家へ挨拶に行かなければならない。もしそれを破るうものなら家訓により処分が下る。

以上二点が彼女達を高揚させるものらしい。まあ、縛るものが興奮させるってのはわからなくもないが。

「まずはやっぱりどうやって出し抜くかよね、以前は藍の親が両方とも仕事で家にいなかったから割と簡単にいったけど今回はそういくとは限らないし」

「それなら委員会の会議があるってことにすればいいですよ、わざわざ学校に連絡する親なんてそうそういませんし」

「へえ、あんたにしては名案じゃない」

逃げることに關しての言い訳と策略は中学後半で山ほど味わっている。特に嫌々入らされた部活なんかは隙を見てよく逃げたものだった。

「ただ、それだと私服をどうやって持ち込むかが疑問になってくるし、会議なら休みにわざわざっていうのもあぶなそう」

言われてみれば確かにそうだ。学校を経由していくのは少々危険を伴うだろう、しかしこれら問題はすぐに解決ができそうだ。なぜならすでに問題点と避けなければならぬところをはっきりしているからだ。

だったらそれを一つずつ潰していけばいい。まずはどうやって外出

するかを考える必要がある。坂本家の特殊な家庭環境を考えるのはそのあとだ。結末を作った後にそこまでのいきさつを考えるのはプレゼンなんかをするときによく使われる工程だ。とりあえず目的としては坂本の親に気付かれずに遊びに行くってことだ。

とすれば、方法は二つ

- ・親しくしている友人の家へ遊びに行く
- ・学校など普段使用している施設の名前を出す

後者は一度はずれているところからして、あまりいい選択肢には見えない。ということで、前者の内容を使えるかどうか質問してみる。

「灯さんの家にはよく遊びに行ったりしてないんですか？」

「え、私の家だったら結構な頻度で来てるわよ。最近は一人で来ることも増えたし、ねえ？」

「うん」

「なるほど、それなら藍さんを灯さんの家に呼んで、そこからの外出てことにしましょう。そうすれば違和感も極力抑えられます」
我ながら名案だ、と思っていると灯さんが身を乗り出して顔を見ってくる。どうでもいいですけど、息がかかってますよ。

「灯台下暗しつてところかしら、ってかこの千円カット美容師に練習させるためについてるとしか思えない頭のどこからそんな精巧な妙案が出てくるわけ？ 信じられない」

「……最後の「信じられない」は結構深く刺さった。

「痛いです。心が」

「あんたの心なんざどうでもいいわよ、じゃあ明日金曜だし、藍は大まかな荷物を持ってきちゃいなさい。私が家に持って帰っておくから」

「いや、ちょっと待って下さい」

そう、ここでカットしてはいけない。あとはルートにある危険因子を抜き取らなければならない。

「それはどうやって持っていくんですか？ 見つかるかもしれませ

んよ」

「それもそうね、じゃあ買っちゃいましょ、明日の帰りにどこかよって買えばいいわ。お金は私が出すから、当日に返す分を遊ぶ分と一緒に持ってきて」

「うん」

「解決はや・・・でもその時間はどうやって取るんです？ 寄り道なんてそうそうできそうに思えませんが」

「あんたは今、その寄り道の一つに参加してるのよ」

「ああ、そうか・・・」

「ってことで、決まっちゃった。日曜日、午前八時にファミレス集合。それだけ確認を済ませると解散となった。」

店の前で坂本は家に迎えの電話を入れ、俺と灯さんは坂本の車が来たのを確認すると、帰路についた。

「なんか、面倒な事になりそうだな」

「そう言う隣を走る自転車から」

「面倒な事になったら、全部あんたの責任にするから、問題はないわよ」

「なんですかそれ？」

「原点の発想はあんたがそう言ったところにあるんだから、責任は全てあんたに帰結するって言うてんの」

面倒だな、やっぱりこんな感じになるか、日曜は息抜きには使えそうにない、出発の日はちょっと早く起きてコーヒーの一杯でも飲んでいくか、リラックスできない休日は大変そうだ。

日曜日、再び話し合いをしたファミレスに集まった、日曜の朝から使う客は少ないらしく、客寄せのためか窓側の席だけが埋まっている状態だった。

俺たちもそんな奴らの仲間入りを果たし、ドリンクバーを頼んでのんびりしていると、灯さんは店内を見回し、

「何なのこの客たちは？ ほとんど全員一人できてるじゃない」

「そりゃそうだ、こんな日、こんな時間にやってくる客なんぞ輸送

トラックのおっちゃんか一人暮らしで自炊が面倒なやつ、もしくは俺たちのように性格に癖のあるやつくらいのもんだろう。聞こえるのも話し声ではなく道路を通る車の音のほうだ。

「生活環境が似ているとその時間に集中するのは当然なんですから、むしろ僕たちのほうが変わってるんですよ」

「なんかそのしつたかぶりをする奴がよく使うような口調はやめて欲しいわね。それとお腹すいたし私はここで何か頼むけど、二人は何か食べなくていいの？」

一つ毒を吐いたあと、そのように言われた。

「じゃあ、俺はピザでも」

「私は・・・いいや、何か食べたくなって訳でもないし」

坂本以外、つまり俺と灯さんが注文して、そんなに混んでいないせいもあってか、すぐに注文した商品は届いた。

しかし、一人食べないでいるのも少し気になる。

「藍さん、何か食べなくていいんですか？ よかったら僕のピザ何切れか食べます？」

なんて事を訊いたら「いい」と言葉だけで遠慮されてしまった。

「で、いつごろここを出るんですか？」

なんとなく訊ねたはずの言葉に、二人の表情が暗くなっていく。俺はというと、何か悪い事でも訊いてしまったような、そんな感じだ。

灯さんは短く息を吐き出し、

「まあ、最終的には言わなきゃいけない事なんだけどね」

「何なんですか？」

「私達の計画、失敗したの」

「・・・・・・は？」

今、なんと？

「だから、失敗したのよ。何もかもがパーになっちゃったの。タイミング悪く見つかったちゃってね」

という事は、俺の出した案がアウトだった、という事だろう。特

に気にするでもなくちよろちよると声をかけて変に計画を落ち着かせた俺の責任である。

「それは、すいませんでした。」

灯さんは話し始めのときからずっと上を向いている。

「今日、曇ってる。行かないにはちょうどいいじゃない。どうせ行くなら晴れてるほうがいいしね」

灯さんの目が、潤んでいた。

「僕に何かできる事は無いでしょうか？ 罪滅ぼしさせてください」
半分社交辞令のように出た言葉。灯さんはゆっくりテーブルに伏せていき、顔を腕の中に埋めた。

「その言い方、ちよつと鼻につくわね、罪滅ぼしなんていらないわよ。ただ・・・」

鼻をすする音がする。

「ただ、なんででしょう？」

伏せていた顔を上げ、コップを出す。

「できるなら、なんでもいいからジュース入れてきて、今日はここでゆっくりしましょ、それとあんたの名前は出してないから、その点は気にしないでいいから」

灯さんは自分でいろいろ行動した事もあつて落胆も俺たち以上なのだろう。二十歳ならアルコールでも頼んだほうがいいのかもしれないが、いかんせん俺達はまだ未成年、そんな事はできない。とりあえずの処置として灯さんのはコーラを入れてきた。酔うことは無いと思うが、

「何でコーラなの？ 私炭酸系苦手なのに・・・。。あんたのはブラックコーヒー、いいや、そのままちょうだい」

俺の手から取り上げ、自分の前に置く。しかしその造作は味気なく、すぐに記憶の外へ出ていく。砂糖とミルクは必要ないのか、そのままゆっくり、コーヒーを冷ますためか間を大きく開けて飲む、飲み干す。

それまで、誰も口を開ける事はなかった。俺も何かを話すような

気にはならなかったため、延々と外を眺めた。時折手元のコーラの事を思い出し、チビチビと飲んでいった。

コップが空になり、空気を混ぜながら口に入ってくる。

「……………間接キス」と灯さん

「今さらですよ」と俺

まあ、そんな事は灯さん自体もわかっているだろう。ただこのなんとなく無駄に流れ続ける時間に対してどうしたらいいのか迷っているのだろう。

「これからどうするの？ 私達」

何もできない。

こうして俺たちの物語は無くなった。

3（後書き）

いやあ、これ僕が書いた初めての小説みたいなものだったんですけどね、これを書いてて思ったのが「小説書くのって読む事の一万倍は難しいな・・・」って事です。

いろいろな方法論とか小説の書き方の本を読みましたけど、そういう執筆に関する苦労はほとんど全く触れてくれないんですよ。

文字という一次元の世界に、三次元またはそれ以外の世界を築き上げる。ましてやそれを楽しいものにする。その活動に必要なエネルギーや持久力、そして語彙や感性といったいろいろな人間的活動力を今回はひしひしと身をもって感じました。

そう考えると長編をたくさん出してる人なんて絶対人間じゃねえ・・・とか思ってますがそれは別のお話。

でも、書いてる間はずっと楽しかったです。自分の中で出来上がっていく世界や物語と関連して思い出される過去はとっても深かったし、今まで一度も思い出した事もないような事もあったりしました。

私はこれを書くまでは読む人限定でいようと思っていました。で、私はいま高ーなのですが、『部活も中学でやる気無くなったし、どうしようかな』とか思ってたネットサーフィンしてたらこんなサイトがあったんです。それで今までに百冊くらい読んでるし、一つくらい余裕だろ、とか思ってた書きはじめてました。

いや、実際余裕もクソもあつたもんじゃなかったのですが。

でもおかげで今まで以上に文章が楽しくなりました。サイト様にもこれからお世話になると思います。

この小説にわざわざコメントを下さった方々、並びに目を通してくださった利用者様、ありがとうございました。

結局やつついで終わってしまいました。色んな勉強になりました。いつかお金を出して買ってもらえる作品を出していけるように

なりたいです。

ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9561q/>

閉塞へと

2011年2月18日00時11分発行